

# 京鹿子

昭和二十三年六月十四日創刊  
月刊 第二十五卷 六月十四日發行  
定価 一〇圓（税別） 郵代 一圓（別送）



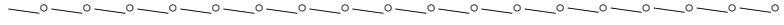
6月号

豊田都峰

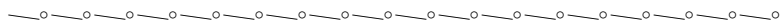
灌響集 その二十二

首塚へ今日のしるべは残花なる  
丘の残花全景として夕日なか  
風化仏天蓋として残り花  
波光ゲのたどりつく辺の芦の角  
里山を越えゆく用や桃の花  
もも咲けばふもとのひより定まれり





芽木山を軒近くして灯をもらす  
夕蛙ぽつりとともる茅葺家  
窓枠は芽木重ね上ぐ比叡の山  
いづこなる花びらふたつのるベンチ  
青き踏むいつしか丘を占めにけり  
ひともとの紅梅ゆゑのみちしるべ  
春の雲青き手帖のつかひぞめ  
石仏のややかたむきて日永なる



手鏡  
丸山佳子

胸に秘す物が一つも入彼岸  
平服で申し訳け無い昭和の日  
衣更へ今日の手鏡偽わらぬ  
プライドの丈が呼吸す松の芯  
文化祭造語に慣れて立札のみ



# 秀華採集

白梅をまつすぐゆくと白梅

田村みどり

なにか清明な人の道の歩み方が、一読すぐに浮かび上がるような詠い方にひかれた。素直に読んで十分だが、このなんの銜いのない俳句に引かれた。

はぐれ蛸蚪杭点々と手ぶらめく

木山 杏理

父系より母系は強し実朝忌

松井 悦子

前句の「はぐれ」になんら手を貸さない在り方もよくみるが、手ぶらぶりの措辞がよい。頼朝亡きのちの尼將軍北条政子を彷彿とさせながら人生模様をも詠う。

鈴鹿 仁

もぢばな

鳥帰る子は父の背を見て育つ

散り際のきれいなはなし花は葉に

もぢばなや利き手おそろしかきくけこ

母の日は赫いろさがす鳥のゐて

目借どき開けたままの文庫本

---

近 詠

---

和田 照海

桜楢

むらさきのほむらを発す桜楢

亀鳴くや家系図のわれどのあたり

海市より戻る馭者なき砂丘馬車

島々はモザイク日和雛日和

家持の妻恋ひの浜磯菜草

# 神麓集



啓 蟄 北村 香朗

何時までも住む家なるや梅薫る  
梅咲いて小唄一ふしうら声に  
たつぷりと冬の苺に練乳を  
啓蟄やゴルフカップに未練なく  
啓蟄や孫より快気内祝

玉 椿 藤岡 紫水

豊満な志功のをんな玉椿  
遙かなるものへの慕情肥後椿  
灯に遠き雛にもほのと影のあり  
ゆるき水脈曳きては瀬田の蜩舟  
なづな長けぺんぺん草となるあわれ

松田 都青

大根漬どすんと母系の重さあり  
心とは固形燃料冴返る  
雪崩去る一期は夢よ舞ひ給へ  
神様の顔まだ知らず冴返る  
耳朶軽く噛まれてゐたり冬の恋

服部 郁史

三月の嵯峨動き出す釈迦の句碑  
この郷につながらる人生冬星座  
鳥帰る揃ひしものゝ一つ欠け  
家のみがもどる処かおぼる月  
朧夜の屋台へ肩を触れに来る

草 萌 丹生をだまき

独り居の友増え電話長き冬  
ひそひそと一日雨音二月果つ  
頬被り取れば旧知よ握手する  
草萌やローンテニスの球の音  
野地蔵の裾を取り巻き母子草

山田をがたま

被災跡被ひつくせぬ春の雪  
みはるかす瓦礫の果ての春の海  
災害ニユースに体調崩し三月果つ  
久しぶり戸外リハビリ芽木見つけ  
五十年ぶり旧友より電話陽のうらら

# 神麓集



くちなしの花 竹貫 示 虹  
まつさきに咲きし山梔子妻に見ゆ  
山梔子の花におもかげ立つ日暮れ  
明け易し夢の中にて妻探す  
溺れさう植ゑしばかりの稲の苗  
螢袋残されし日もかく暮れて

落 椿 柴田 朱美  
夕暮は落ちし椿を遊ばせて  
諦めに似し沈黙や落椿  
虚しさを溜めこみ椿落ちやまず  
喪の家のいたるところに落椿  
石白が庭石となり椿落つ

浮 浪 丸井 巴水  
飛び道具持たず二月の山へ入る  
一枚のベニヤが個室浮浪の寒  
マネキンの和服を剥がす名残雪  
幹に似ぬ枝につぎつぎ梅が咲き  
斜め読みせし如月の果ての暮れ





# 自 句 随 解

## 鶺鴒のとんとんまるくなるひぐれ

平成十四年作

鶺鴒は尾を振る。ために「石たたき・庭たたき」とも言われる。  
三好達治に次の詩がある。題は「鶺鴒」

黄葉して 日に日に山が明るくなる

谿川は それだけ緑りを押し流す

白いひと組 黄色いひと組 鶺鴒が私に告げる

「この川の石がみんなまるいのは

私の尻尾で敲いたからよ」

私のイメージに達治の作品がからまっていることは承知している。私は詩を読むが、意識的にイメージや語句を引出にしまっておくことも多い。

句集『雲の唄』鶺鴒・秋



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

白梅をまつすぐゆく和白梅 東京 田村みどり

日永かな谷崎源氏の和紙の反り

百引く七引く七えいと蕪の水晶煮

桃の花國中お墓になると泣きし

さようならの握手の寡黙花ミモザ 木山 杏理

はぐれ蝌蚪杭点々と手ぶらめく

雪柳ゆらゆら街の風になる

水の声耳底に溜め山椒の芽

茹で汁の青きをこぼし春立てり 城陽 松井 悦子

鶯やにぶく光れる裁ち鋏

一雨に末黒の芒なじみをり

父系より母系は強し実朝忌

立春の草子届けられ会議果つ 五月子 伊吹 之博

大試験娘からのメールに感謝沸く

神様に育てられ吾子及第す

風光る子に徳残す米紳士

地吹雪や思はず縮む首の筋 酒田 藤波 松山

冬晴や何か良い事したやうな

鬼やらひ声をあげても妻一人

雛飾り男結びの棚の中